

説明要望（質問）	説明（回答）
<p>■ナンノ谷3号砂防堰堤 災害復旧工事</p> <p>①Co擁壁による仮締切について</p> <p>Co擁壁を仮締切として使用する場合は、大型土のうに比べ施工期間が長くなります。その際の仮排水（仮締切のための仮設）についてご教示願います。</p> <p>②出水リスクについて</p> <p>ナンノ谷砂防ダム3号の資料P.31に”3. 出水リスクを受け入れることにした”とありますが、具体的にはどのようなリスクでしょうか。また、そのリスクに対してどのような対応を散られたかご教示願います。</p>	<p>説明（回答）</p> <p>対象流量にこだわらない断面を確保するように（平常時の流量程度）、少し掘り込んで大型土のう等で締め切る必要があります。また、計画上は、中部の砂防施設設計要領に基づいて重力式擁壁としています。また、施工者さんで所有されていれば、プレキャスト擁壁等を用いて工期短縮を図ることが有効です。</p> <p>通常であれば、設計成果どおり、計画高水流量の25%相当にあたる175.8m<sup>3</sup>/sの流下能力を確保した通水断面とするところだが、仮設に要する時間を短縮して、工事の進捗をあげるために、締め切りについては対象流量にはこだわらず、簡易な構造とした。その結果、出水により複数回現場が水没することになったが、清掃等にかかった時間を考慮しても、仮設に要する時間が大幅に短縮したことにより、工事の進捗は大きな効果があった。</p> <p>ただし、仮橋については、対岸に渡るルートの確保が災害復旧工事では特に重要であること、また、流失した際の復旧に時間がかかることに加え、流失した際には再利用が難しくなる可能性も踏まえ、河川構造物設計要領を参考に、過去5年の最大時間雨量から算出した推定流量である407m<sup>3</sup>/sを流し得る断面を確保することとしている。（指定仮設）</p>
<p>■ナンノ谷1号改築工事</p> <p>・ナンノ谷1号改築工事の道路基礎地盤について、N値が低い層でも支持力は大丈夫だったということでしょうか？通常、N値10ぐらいだと支持力200KN/m<sup>2</sup>程度のイメージです。N値が低い層が局所的だったのでしょうか？ボーリング結果にあった低いN値の層は、何が原因だったのでしょうか？施工時の平板載荷の方法（ボーリング位置で行ったのか、この周囲の弱い層を確認した上で行ったのか、何か所ぐらいで行ったか等）や、問題ないと判断した根拠を教えてください。</p>	<p>道路沿いの5箇所のボーリングデータより支持地盤を判断。</p> <p>(6)基礎地盤</p> <p>①支持層の評価</p> <p>擁壁の基礎地盤は、地質調査の結果によると、概ね盛土層（b層）と段丘堆積物層（tr層）に位置する。</p> <p>盛土層は「砂質土-密実でないもの」に区分されN値が4~11と低いため、擁壁の支持層としては不適である。</p> <p>段丘堆積物層も「礫-密実でないもの」も区分されるが、N値もバラつきが多く6~21となっていることから、一般的な段丘堆積物層よりも地盤が緩く比較的新しい地層であることが考えられ、確実な擁壁支持層とみなすことは難しい。</p> <p>ボーリング地点と、平板載荷試験の場所は一致してはいないが、今回の施工箇所の中で、一番基礎高が低い場所（一番条件が厳しい場所と推定）を平板載荷試験の実施場所（代表箇所）として選定した。</p>
<p>■ガラン谷</p> <p>アンカー工について、掘削して推定岩線と異なるわかった時点から、設計計算しなおして法面工を再設計するまでに要した期間と、それまでの間の法面保護の方法（ブルーシート程度のみ？）について教えてください。</p>	<p>岩線確認から設計終了まで約1ヶ月を要した。なお、その間の保護は、ブルーシートでの保護を行っていた。</p>

